

第4回  
県立高等学校あり方検討会  
議事録

令和3年3月25日(木)  
高校教育課高校魅力化推進室

## 第4回県立高等学校あり方検討会

### 【事務局】

○委員の皆様、こんにちは。定刻となりましたので、ただ今から第4回県立高等学校あり方検討会を開会します。本日の日程は、配付資料1ページにございます。会次第に沿って行い、15時30分の終了を予定しておりますので、御協力をよろしく申し上げます。

まず始めに、委員の皆様の出席を確認させていただきます。資料3ページをお願いします。本日は委員の皆様全員に御出席をいただく予定になっております。夏木委員におかれましては少し遅れておられますので、後で御出席していただけたらと思っております。なお、奥田委員につきましては、オンラインでの出席になります。よろしく申し上げます。

従いまして、資料の6ページにございます設置要綱第6条第2項の規定に基づき、本検討会が成立しますことを御報告します。

それでは、今後の議事進行については、設置要綱第5条第2項に基づき、半藤会長をお願いします。半藤会長よろしく申し上げます。

### 【半藤会長】

○皆様こんにちは。議事に先立ちまして、一言御挨拶を申し上げます。

桜が心から楽しめなくて、残念でございます。首都圏ではコロナ感染症がなかなか収まらなくて、熊本からすると首都圏の人間は何をやっているのだと文句を言いたくもなります。そんな中、平成の三四郎と言われた古賀稔彦くんが亡くなりまして、実は古賀くんは東京の世田谷学園のスポーツクラスの生徒だった時に国語を教えていました。スポーツクラスなので、野球部・柔道部・バスケット部といった強化指定された子ども達が、大半、寮生活をしておりまして夜遅くまで厳しい練習をしていました。授業中に私語はありませんし、机にうつ伏せになっているということはなく、みんな顔を上げていましたが、明らかに私の話は聞いていないなとか、あるいは見るからに目が泳いでいるような生徒がいる中、古賀くんは全ての授業で背筋を伸ばして、しっかりした姿勢で、教師である私のほうをずっとにらみつけるように直視していたことが忘れられません。大変しっかりしているように見えたので、「君はしっかりしているね。」と声をかけましたら、躊躇なく「僕はソウルの星ですから」と答えました。残念ながら、ソウルでは輝けなかったのですが、バルセロナで金メダルに輝きました。私はこの時の古賀くんの顔を今でも忘れることができません。本当に星になってしまいました。私にとっては、彼はいつまでもソウルの星だと思っています。

その世田谷学園ですが、私が非常勤講師で勤めるようになる頃には、中学を併設し、学校改革を行っていました。東京大学へ今や10人前後は毎年進学しますし、早稲田大学や慶応大学にも70、80人進学するような学校になっています。それを見ましても、学校改革はつくづく意志が大事だなと思っています。

それでは本日、第4回のあり方検討会になりますが、皆様よろしくお願ひ申し上げます。

それではまず議事の一つ目として、会議の公開・非公開についてお諮りします。これにつきましては、本検討会の運営要領第5の規定に則り、関連する協議内容に応じて、冒頭で公開・非公開の協議をしていただくこととしています。本日の検討内容については、特に非公開とすべき案件はなく公開することに支障はないと考えられます。よって、本日の検討会については、公開とすることによろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、公開することと決定します。

それでは、本会議の重要案件である(2)の「県立高校の未来を考える～そのあり方と魅力づくり～」提言案について、事務局から御説明をお願いします。

#### 【事務局】

○それでは事務局から御説明します。

まず資料1を御覧ください。こちらは、前回の会議で提言案について、委員の皆様からいただいた御意見への対応を一覧にしたものです。この一覧は、委員の皆様へ事前に送付し、既に御確認いただいておりますので、本日、全ての項目を説明することはいたしません。前回会議で事務局に検討するよう御要望があった項目につきまして、少し御説明をします。なお、ここに掲げています修正箇所は、本日お配りしております提言案では、朱書きの見え消しで示しています。

それでは資料1の裏面の1番下にある、半藤会長の御発言の1をご覧ください。会長から、学級減を行う上では客観的な基準が必要であり、事務局で基準の案を示してほしいという旨の御要望がございました。事務局としましては、右の欄にありますように、定員割れが例えば3年以上続いている学校においては、魅力化の取組みと併せて学校規模やこれまでの学級減の取組み状況も勘案しながら検討していくこととしています。

続きまして、資料2をご覧ください。県教育委員会では、県立高校のあり方や魅力化につきまして、中学校の校長先生方との意見交換や県立高校の校長先生方からも意見聴取を行いました。また、県議会の2月議会では、複数の議員の皆様から御質問をいただいたところです。こうした方々の御意見なども踏ま

え、事務局として提言に盛り込んでいただきたいと考えている事項についてまとめ、本日、修正案として提示させていただいています。なお、ここに掲げています修正箇所は、提言案では青色で示しています。

それでは、順番に御説明をいたします。

提言の20ページ及び39ページには、中高一貫教育校を今後設置するかどうかについての記載がございます。修正前は、市町村立中学校の生徒数の減少が見込まれる中で、今後、新設する必要は低いとしていましたが、生徒数の減少のみをもって設置を判断するのではなく、設置の必要性などを併せて考慮すべきと考え、修正後の欄にありますように、県立中学校卒業生数や入試の動向も注視しつつ検討していくという表現に修正をしています。

次に、提言の36ページです。ここでは、定員充足率と全国学力学習状況調査の結果の間には、一定程度の相関が見られるとしていました。これにつきまして、改めて過去3年の状況を調べましたところ、弱い相関があるという結果でした。このため、得点も低い傾向が見られるという表現とさせていただきたいと思います。

また57ページには、総合学科等、学科等の設置に関する記載がございますが、中央教育審議会の普通科改革に関する答申を踏まえ、本県でも全体的な諸課題や地域社会の問題解決のために、探究的な学習を提供する学科等の設置を検討していくことについて記述を追加しております。本県におきましては、既に鹿本高校のみらい創造科で、こうした新しい普通科を設置した実績があり、今後も他の県立高校に広げて参りたいと考えていますので、その点を反映させたものです。

同じく57ページには、高大連携についての記述がございますが、今回、専修学校いわゆる専門学校との連携強化について記載を追加しています。これも現在、国が専修学校との連携による職業教育を推進していますので、今後、本県でもそうした取り組みを検討していきたいと考えているためでございます。

次に、60ページの入試制度のあり方につきましては、前期特色選抜における募集定員の割合の上限引き上げなど、必要性、緊急性が高いと思われる制度改正については、令和4年度入試から導入を検討する旨を追加しています。この修正部分につきましては、提言案と資料2の修正案の表現が違っております。提言案では、少し分かりづらい表現となっていましたので、資料2の修正案でお願いしたいと考えています。これにつきまして、皆様も御承知の通り、令和3年度の県立高校の入学選抜の状況を見ましても、大変厳しい結果となっています。中学生の早く入学先を決めたいというニーズはかなり高いという御意見をお伺いしています。また、入試制度の見直しは、県立高校の校長先生からも多く要望が出されています。こうしたことから、今回修正案に加えています。

続きまして、61ページでございます。ここでは、魅力化の取組みの実施にあたっての重要なポイントや全体的な進め方を示すため、新たに魅力ある学校づくりに向けた今後の進め方の記載を追加しています。

最後に、魅力化の推進にあたっては、教職員の確保や施設整備、さらには、地方創生の観点からの教育活動も重要となることから、「終わりに」の4段目、5段目に、県教育委員会と知事部局との連携や各自治体における取り組みや支援が必要であることを記載しています。説明は以上です。よろしくお願いいたします。

#### 【半藤会長】

○御説明をいただきましたが、前回のこの会議で提言案について、いろいろ御意見をいただきました。それを踏まえ、資料1にありますような修正を加え、委員各位には御了解をいただいたところですが、今、御説明にあったように、その後、資料2のような御意見が出てきたということで、それを事務局として精査され、提言案に盛り込んだものを今回、最終案という形でお出しいただきました。

それでは資料2で、今、御説明あった部分を御確認いただき、これで特に問題はないかどうか御意見、御質問いただければと思いますが、特にこの点について御発言がありましたらお願いします。

中学校の要望を踏まえてということで、特段、問題があるような修正ではないと考えられますが、御質問等いかがでしょうか。

#### 【越猪委員】

○意見ではございませんが、60ページの修正後の記述ですが、黒ポツの二つ目の「必要性や緊急性の高い」というくだりがございますが、「募集定員」がふさわしいのか、「募集人員」がふさわしいのか、御確認を後ほどで結構ですのでしていただければと思っています。よろしくお願いいたします。

#### 【半藤会長】

○事務局におかれましては、御確認をお願いし、適正に処理されたいと思います。他に、この資料2についての御発言はございますか。

#### 【内村委員】

○今の入試制度のあり方の検討ということで、これは正直言いますと、私学にとってはかなり厳しいことが出てくるわけですが、県立高校のあり方としてはこういうことが出てくるだろうなと思います。ただ、もう少し話し合っ

等を考えていただき、実際、運用面においてその点だけを是非お願いしたいと思っています。

**【事務局】**

○御意見ありがとうございました。入試につきましては、内容も含めまして、今後検討し、説明をしていきたいと思っています。よろしくお願いします。

**【半藤会長】**

○提言ということになりますが、実際に実施ということになりましたら、各方面との調整や議論を踏まえて進めていくことであろうと理解しています。他に、御発言はいかがでしょうか。

**【橋口委員】**

○61ページの魅力ある学校づくりに向けた今後の進め方に関して読んでみますと、子ども達の視点というか、そこにいる学校の子どもの、自分が行っている学校が無くなる危機感などは、やはり共有すべきであり、その下に標記のある運営協議会の中に、学生を入れるかどうかは議論が必要かもしれないのですが、是非、子ども達の学生の意見も反映していただければと思っています。意見として発言させていただきました。

**【事務局】**

○貴重な御意見ありがとうございました。学校運営協議会におきまして、学校を通じて、生徒の意見を十分取り入れていきたいと考えています。

**【半藤会長】**

○前回の議論にもあったかと思いますが、やはり大人目線の改革ではなく、生徒自身の目というものも踏まえながら、改革は進めたほうがいいということだと思いますので、その辺りも踏まえて進めていただく内容になっていると了解しているところです。他には何かございますか。奥田委員は何かございますか。

**【奥田委員】**

○今の61ページのところに関連して、危機感の共有をしながら進めていく必要があるということを書いていたと思いますが、もう1点重要なことが、既に熊本の中でも、たくさん良い事例があると思いますので、そういった魅力ある学校づくりが先進的に進んでいるところの事例であったり、具体的な生徒の

変化のようなことも、危機感と併せて可能性というか希望のようなところも共有することです。一方ではそれぞれの学校・地域が進めていくプロセスにおいてぶつかる課題だったり、それをどう乗り越えているのかということも共有しながら進めていくことが推進につながるのではないかなと考えています。

また、限られた期間で、そのプロセスをどう進めていくかということも、今後、事務局の皆様が具体的に考えていかれるかと思うのですが、そういったスケジュールというかプロセスの設計も重要になってくるのではないかなと思いつながりながら、拝見させていただきました。これまでの会議で出た多様な意見を反映させてとりまとめていただきありがとうございます。

**【事務局】**

○奥田委員から貴重な御意見をいただきました。危機感と併せて、実際に良い事例もたくさんございますので、そこも併せて書き込める部分があれば検討させていただきたいと思っております。また、今後の進め方につきましては、提言をいただき、それをもとに、それぞれの取組みのロードマップ等も作成し、進めていきたいと思っております。

**【半藤会長】**

○はい。ありがとうございました。

**【足立委員】**

○ちょっといいですか。二つあるのですが、一つは「終わりに」の部分に、「国への施策提案や民間等の支援策等」と書いてあるが、この「民間等の支援策等」がどんなものを指すのかなというのがあります。

それから、今後の進め方で、私は最近マイスターハイスクールも施策にちょっと関わり持ったので、それに私自身が産業界の代表ということで、産業界が「教育関係者・保護者・地元関係者」という中に、保護者、地域行政と深い関わりを持つという意味で、マイスターハイスクールなどは、まさに産業界と連携をとるべきだと文部科学省が言っているわけで、その辺のニュアンスが出るようにしてほしい。また、具体的に「民間等の支援策」については具体的にもう少し言われたほうがいいのではと思います。よろしく願います。

**【半藤会長】**

○事務局で何か御説明がありましたらお願いします。

**【事務局】**

○今、足立委員から御質問がありました民間等の支援策につきましては、例えば、今、芦北高校は地元である芦北町に進出されてきたIT企業と一緒に連携しながら、学びを深めている状況ですので、そういった地元の企業さんとかNPO法人とかもあると思うのですが、そういったところと連携していければということをご想定して「民間からの支援」と記載しております。よろしいでしょうか。

**【半藤会長】**

○産業界についての協力についても、少し明示的にということもありましたがいかがですか。今の記述で読み込めるという御判断でしょうか。

**【事務局】**

○はい。一応連携として、地元の関係者というところと、今書いておりますところで読み込めるかなとは思っております。

**【半藤会長】**

○あまり細かく具体的に書きますと、これはどういうことなのかという議論になるので、少し柔軟性を持って記述しているのだろうと理解しますが、そういう御要望等もありますので、今後については、その辺りを十分配慮して実施していくことが重要だろうと思います。

**【末次委員】**

○今、説明の中で、60ページの入試制度のあり方の検討について、私自身がちょっと気になったことがあるので教えていただければと思います。まず内容について、必要性や緊急性が高いというような表現をしてあるのですが、必要性につきましては趣旨の中に文言として出て参ります。もう一方の緊急性については、何を以て緊急性が高いというようなことを指すのか、理解ができませんので教えてください。

**【事務局】**

○はい。ありがとうございます。緊急性の高いところですが、やはり今年の入試結果を見ても分かるように、なかなか厳しく、定員割れがさらに進んでいることがございます。そういった意味で早急に、当初は令和5年というこ

とで書いていたのですが、令和4年にできるものは対応していくということで緊急性という言葉を入れております。

**【越猪委員】**

○私は、高校の校長先生たちからのお話を聞いておりました、例えば前期選抜、後期選抜とありまして、非常に地域に根差した学校でありながら、後期選抜では出願者が極めて少ない。そういう地域の特色ある学科コースが取り組みをしながら、なかなか入試制度のいろんな縛りの中で、子ども達が地元の学校に行けない。そういう事案が少なからずあるということです。前期選抜でパーセンテージが決まっていますと、例えば20人のところに23人が応募した時に、3人は落ちてしまうわけです。そうすると、その子ども達は、非常に熱心に取り組んでいる地元の学校に、前期選抜ではなかなか入れないことがあります。よって、そういう子ども達について、もう少し入試制度について考えていただくならば、救えるのではないかという校長先生たちの御意見がありましたのでお願いできればと思っているところです。

**【半藤会長】**

○委員よろしいでしょうか。地域ごとに、様々な課題がありますので、それを踏まえて、必要に応じて機能的に動けるようにという意味だということを確認したいと思います。

**【音光寺委員】**

○関連してですが、中学校としては、入試制度が変わることは、非常に大きな影響があります。特に期日等も、学校行事等にも大きく影響して参ります。そういった点からすると、是非中学校からも、その会議に出席いただいて、御意見をいただくことが必要だと考えます。中学校の校長先生の意見としましては、今の状況であれば、前期選抜と後期選抜と分ける必要があるのかなという意見が多く出ております。そういったことも踏まえて、是非、中学校からの御意見等も聞いていただければと思っています。

**【半藤会長】**

○他にはよろしいでしょうか。

色々御要望をいただいたところではございますが、いずれも提言案について、大きな修正を図るものではないと思われれます。この提言案については、今いただいたような御要望等も可能な限り盛り込むということについて、会長一任をいただければ、私のほうで事務局と協議しながら盛り込んでいくという形

で修正したいと思いますが、それでよろしいでしょうか。

ありがとうございます。今のことを踏まえて、本検討会として提言案について御了承をいただくということでもよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

本検討会の役目は、この提言案を作成したことで最後になりますが、今、委員各位からいろいろな御意見をいただいたところです。それぞれの立場におかれて様々な御不安や希望等、色々おありになるのだらうと思います。提言案はお認めいただきましたが、今後これを実現していく上で、是非こういうことをということについて、委員全員から、御発言をいただければと思います。今後、いろいろなことを具体化していく上で、おそらく委員各位の御発言が大変意味を持つこともあろうかと思しますので、是非お一方ずつ御発言をお願いしたいと思えます。では、田中委員からお願いします。

#### 【田中委員】

○熊本大学の田中です。まず、私の発言も提言に含み入れていただき、厚く御礼申し上げたいと思えます。本年は熊本地震から5年目ということで、全国的に全世界的にコロナがあったり、去年も豪雨災害があったり、そういう災害に強い国づくりということを考えていく時に、熊本だからこそできること、特に教育において、サステナブルという考え方が、SDGsなどもありますが、これから長く、熊本らしくあるべきだと思っていて、それに教育が根幹にあることは間違いのないと思えます。それに加えて、社会教育というものも考えていただければと思えます。

「終わりに」のところで、従来の制度や枠にとらわれない思い切った発想や取組みなど、先ほど奥田委員からも可能性というお話がありましたが、まさにそういうソーシャルイノベーションを起こせる熊本であって欲しいなと思えます。それはもちろん、子ども達の頑張りもあるわけですが、やはり先生方、そして地域の皆さん、提言の中でも「将来のまちづくりを見据えた積極的な取組み、支援」と書いていただいたように、地域の自治体や企業、NPOなどの多様なステークホルダーと一緒に協働していく力を、是非高校生の中に身に付けていただき、そのためには中学生や小学生と共に、小中高の連携そして私どもの大学なども一緒にやっていけたらと思えますので、信頼し合うというか、お互いに悩みを相談したり、困ったことがあったら抱え込まずに、一緒にやっていこうという熊本であって欲しいなと思えます。

#### 【足立委員】

○前回は申し上げましたが、ICTを前面に取り上げていただきまして本当に

ありがとうございます。また私自身、今回、産業教育振興会として、大変勉強になりました。こうやってきちっとした高等学校のあり方というものを考えたことがなかったものですから、非常に私にとっては個人的にも有益でございまして、そういう流れの中で先般、産業教育におけるSTE A 研究会というのを立ち上げました。これは経済産業省のサービス政策課、産業教育というところが、未来の学校・STE A 教育という学校でやっております。その方もメンバーに入らせていただきまして、これからいろんな形の組み合わせといいますが、連携があるものですから、そういった一つの推進軸みたいな形で、熊本らしいものが出てくれば良いなあと、今取り組んでいるところですが、その中で一番、先生方に申し上げていることは、やはり生徒ファーストと言いますか、生徒があつての学校教育だということで、我々企業は、やっぱり現場あつての企業でございまして、人があつての企業ですから、そういう視点で、お願いしようということで今、アンケートをとったり取りまとめたりしているところです。そういう意味では、今回のあり方の中にも、提言を入れていただきましたし、大変我々の活動にも追い風になった提言案だと思っております。本当にありがとうございました。

#### 【小多委員】

○熊日の小多です。最後ということですが、私は20数年前位から断続的に教育ジャンルの取材を続けていく中で、教育問題というものがなかなか難しい、でもユニークだなと思ってきたことは、万人が教育について語る、語りえるということです。自分自身の経験もありますし、子供、地域の中でということで、誰もが教育評論家になってしまう。これはある意味で、多くありそうでないジャンルだなと思ってきました。その中でも取材している中で、一つあったのは、先ほど橋口委員や足立委員からもありましたが、子供、生徒がどう考えているのか、どう思っているのかということに、きちんとアプローチする取材というのは、実は僕らもとても難しかったというか、よくよく教育問題を探っているつもりでも、生徒に関係する、ある意味で主体である先生方や親の話になりがちで、子供が主役なのだけれど、見えにくいというのが、万人が語るにしては難しい。なかなか教育問題は、真の当事者であるところが見えないというのが難しい。それと時間軸について、今、先生方とお話すると、今行っている教育活動が果たしてどう成果として、それも単なる入試の結果ではなくて、もっと大きな意味での成果として、時間軸のとらえ方が難しいということが教育だなと思っていました。そういう意味で今回こういった形で、提言の中で、やはり地域と言いますか、高校が抱える当面の課題について着手して、当面できることや、可能性を模索し、具体化していこうと、かなり踏み込んで方向性を打

ち出されたことについては、今後の施策への反映を本当に期待したいと思いません。

また文言の中で、細かい部分になりますが、例えばスクール・ミッションとか、スクール・ポリシーとか、おそらく、先生方もそうだと思うのですが、言葉こそ違えど、ずっとそれは各学校、教育委員会もずっとなってきたことだと思うんです。それが、ミッションとかそういう言葉ではないにしろ、今回これだけの、ある種の危機感を持って県教育委員会で進められるというところが、どう浸透するのか。学校現場としては、そんなことは分かっているけれども、どうにもならなくてこの間ずっときた。どうしたらいいのというところが、もしかしてあられるかもしれないので、そこを何かこううまく掬い取るため、それについては、この検討会の中でも申し上げましたが、やはり学校での先生方の、余力というか、よしやろうかということに、思い至るような、それが、先生方のニーズなのか、何かわかりませんが、やはりその担い手である先生方のところに教育委員会として、或いは地域として、注力していただけるようなところが一つ鍵かなということは、私見ですが、そういったところです。

#### 【橋口委員】

○事務局の皆さん、そして会長、本当にお疲れ様でした。今回私自身、この検討会に参加することができて、専門の皆様方の話を聞いて、私自身が、とても勉強になりました。今回、特に参加して思ったことは、多分魅力というものは、今から人口も減少していく中で、全国どこでも県立高校の魅力というようなものは考えていくのではないかなと思っています。そういった中で、本当に田中委員や奥田委員が、熊本らしさという話をされましたが、熊本らしさが本当に何か輝いていければ、全国から生徒が集まる県立高校になるのではないかなと思っています。今回の提言にもそういう話は出てくるかと思いますが、この提言について、皆様方ともに頑張っていたいただければと思っています。ありがとうございます。

#### 【吉永委員】

○今回この会議に、町村教育長会の代表で出席をさせていただきました。町村教育長会はですね、県下で31ある、ほぼ郡部にある教育委員会なのですが、そこに出席するある郡部の教育長から、私の地域では、県立高校がなくなって非常に寂しいという話も聞いたことがあります。また別の方からは、県立高校の定員割れが続くような状態を見て、将来、高校がなくなるのではないかという不安があるという話も聞いたことがあります。そういった中で、熊本市以外のほとんどで、これは変えられないと思うのですが、小中学校の小規模化がど

んどん進み、子供たちがふるさとに残って欲しいという願いは、非常に強く地元の人にとってはあるわけです。ということは、熊本市に気持ちは向かっているかもしれませんが、やはり熊本市内ではなく、地元の高校に行って、地元を支えるような子供たちに育てて欲しいという願いがあるのですが、そのためには、今回できました魅力の推進がなされることを願っています。提言の中には、下げ止まりが続く令和9年までが非常に大事な期間ですという文言もありますので、こういった危機感をみんなで共有して、そして定員割れを少しでも食い止めるように、県立高校の魅力が出てきて、子供たちの目はその魅力に向くような施策がどんどん出てくればいいなと期待をしております。

#### 【末次委員】

○短期間の中で、事務局の皆様方には、本当に素晴らしい提言を作成していただいたこと、会長をはじめ、感謝申し上げたいし、敬意を表したいと思います。ありがとうございます。この提案を、最初から振り返りますとすべてにおいて、成果であり、その前に課題を抽出して、精査され、そして今後どう取り組んでいけばいいのかという方向性まで明示されています。こんなに素晴らしい提言案ができていますので、これを今後、学校現場に、高校もしくは中学校、小学校、それぞれの段階に応じて、やはり熊本県の教育、熊本ならではの教育が途切れることなく、段階を追いながらですが、続けていくことができればいいなと感じています。やはり今後の魅力ある学校づくりは、本当に前回も申し上げましたが、中学生が目の前に見ていることであり、そして小学校も同様に近いわけですので、ぜひその段階を追いながら、なだらかな連携ができるように、さらには、大学、その出口のところも含めて、熊本で学んでよかったと言える子ども達がたくさん出ることに繋がっていけばいいなと思いながら、この提言を見させていただきました。素晴らしい提言案ですので、ぜひこれが浸透するような手だてをそれぞれでやっていかなければいけないなと感じたところです。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

#### 【内村委員】

○私立学校代表ということではないのですが、こんな形で参加させていただき本当にありがとうございました。県立高校のあり方がどんどん改革されていけば、今度は私立高校も負けてはいられないということになり、良い競争関係も生まれてくるだろうなと思っています。ただ、県立と私立の両方で、私はいくつか最近悩みがあり、精神的に非常に弱い子供たちが増えてきていて、コミュニケーションも取れない。ある面では、ちょっと言葉が悪いですが、発達障がい的な傾向を持っている子たちも非常に増えてきている。そういう中で、クラ

又定員の小規模化なども行われていくのであれば、やはり一人一人にもっと寄り添う教育ができないと、高校の魅力が出てこないのではないかと思います。魅力っていろんなものがあるのですが、やはり先ほどおっしゃったように、この学校に来て自分の子どもが非常に安心して通うことができ、良かったという評価があるためには、やはり一人一人の生徒に対する働きかけがないといけなわけです。そういう点では、もっともっとその辺を強調していいのではないかと考えています。

もう1点、昨日実は、私の学校で地域課題解決プロジェクトということをやっています、昨日は公立高校の菊池高校に来ていただき、公私立合わせて、いろんな面白いことを子どもたちが企画しているわけですが、菊池高校の企画で面白かったことは、学校で婚活パーティーをやろうという提案なんです。非常に面白いユニークなことで、やはり魅力化で最初の前提としては、学校に足を運ぶことではないでしょうか。学校が身近な入りやすい場所にならないといけなのではないか、敷居が低いというのでしょうか。そういうことを考えていまして、そういう婚活パーティーみたいな提案は、非常に面白いなあと思いつながら、校長先生自らが、そういう形を提案されているといった話のようで、担当した教師たちはそういうことを言っていました。言ってみれば、本当にやる気を持って、それこそ自分のこととして受け止めて、それぞれの学校で、そして先生たちが取り組めば、非常にいい魅力のある学校づくりができるのではないかと考えています。そういう点で、ぜひ県立も頑張っていたきたいし、私立も頑張っていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

#### 【音光寺委員】

○今回の提案、提言には小学校中学校と地域の連携というキーワードがたくさん入っていて、本当にありがたく思っています。また53ページの(3)のところに「県内どの地域の高校であっても進学の実現に挑戦できる環境づくりを進めていく」という記載があり、本当にここは有難く思っています。やはり、最終的には、子供たち生徒一人一人の進路保障が、一番大事なキーワードになってきますので、そこをやはりしっかり目指しているということは素晴らしい提言じゃないかなと思っています。

先ほど質問があった、定員の部分の必要性、緊急性というところで、私も本当に緊急性があるなと思います。本年度の入試を見ましても、新聞で報道されたところに、本当に中学校の危機感を持っているところです。特に郡部の普通科も、実業系の高校も、本当に厳しい状況だったと、中学校側も反省していかないといけないと思っています。ただ、私が教諭時代の平成17年ぐらいの子供たちの時を考えると、どこの学校もその当時は定員オーバーでした。

普通科も、ほとんど地元の学校も県立の学校も定員オーバーの状況で、子供たちは進路選択をしていったのですが、それがもう今は、逆転してしまっているという状態です。では、なぜそうなってしまったのかを自分なりに整理してみると、特に専門高校を選択するにあたっては、その学科を選んだときに、自分がその学科に本当に適性があるのかどうかを、子供たちは悩むと思うのです。今、中学校で私も前期選抜を受ける子たちの面接指導をしているのですが、将来の夢は何かと生徒に聞いた時に、夢がはっきりしている子と、高校になって考えますという子も結構たくさんいます。なぜそこまでできていないかと考えると、やはり小中高のキャリア教育をもう少し重視しなくてはいけないと思っていますところ。先週、うちの学校で、校内ハローワークという行事を、中学校一・二年生対象に、16の企業からおいでいただいて、職業講話をしていただきました。なぜそうしたかということ、地元にいるんな企業とか、農業関係の方とか、公務員の方が、たくさんいらっしゃるのですが、そういう方々がどういう仕事をされているのか、そしてどういう進路をたどって、どういう生きがいを持っているらっしゃるかということ、なかなか子供たちが今は知る機会が少なく、特に今年は、職場体験もコロナでできませんでしたので、そういう職業人と触れ合う場が多くありませんでした。昔は、小学校の時に工場見学とか、いろんな地元の見学をしていたのですが、今はもうほとんどそういう機会もなくなってきており、いろんなこういう仕事につけますよと、インターネット等でたくさん調べることはできるけれど、実際その方々と触れあうことが、減ってきているということがやはり大きく関係しているのかなと思っていますところ。だからこそ、子供たちが自分の適性をなかなか見出せないという部分もあり、だから高校に行って、また考えますという子供たちが、昔よりも増えてきているのかなと思います。昔はやっぱり身近に職業を感じる機会が多かったし、親の仕事を見て育つような、私たちの時代はそうだったのですが、そういった機会をもっと増やさなくてはいけないと思います。提言に書いてありますように、高校生の姿を、例えば勉強しているとか、作品を作ったとか、そういったもので、まだ小学生のふれあいを、身近に行ってほしいと思います。昔は上下関係で遊んでいる地域の子供たちがあったのですが、今はそういうことが非常に少なくなってきているので、そういうモデルになる高校生を、ぜひ作り上げて欲しいと思います。そして高校生に憧れ、今度は高校生が大学と連携して、大学生や社会人にあこがれるような、魅力ある、熊本の人づくりをぜひ、小中高と連携してやっていただければ、先ほどからおっしゃっているように地元で、企業とかに就職して頑張ろうという子供たちを増やせるのではないかと思います。校内ハローワークをして、地元の企業の方とお話した中で、子供たちは、その工場の前を通っているけれども、見ることはできるものは工場

の壁だけで、中でどんな仕事をしているのか、例えば車が中に入っているのは分かるけれども、じゃあ何を作っているのか知らないのです。毎日通っているのにです。でもそれを知らないということは、やはりそうしてしまった企業側も、高校生とはインターシップでされていますとおっしゃるのですが、中学生には全くそういう機会がなかったということで、相当喜ばれました。そういうふうに、高校生のインターンシップをしても、結局、地元こんな企業があっても、外に出ていってしまうんです。企業の方は、やはり地元の子は地元からたくさん募集したいという気持ちがあります。だからこそ小学校や中学校で早めに触れ合う機会を持って欲しいということはお話ししました。熊本県内でも、世界で通用するような企業はたくさんありますし、農業関係でも、全国に通用する産業も製品も、たくさんあるわけです。それをなかなか、小さい頃から、もっと魅力的に、これはもう高校だけではなくて、小中学校も合わせてやっていく必要があるのではないかなと、今、痛感しているところです。

#### 【夏木委員】

○地域の皆様をはじめ、半藤会長含め委員の皆様、本当に素晴らしい提言を、県教育の素晴らしさが、本当に今回参加させていただき、深く理解することができ、大変光栄に思っております。またその中で、前回もお話ししたと思うのですが、先日、熊日新聞の高校の広報誌コンクールの審査に参加し、その中で、審査内容はもちろん紙面の内容ですが、見出しとレイアウトを重要視されているものでした。素晴らしい中身ではありますが、読んでみたら伝わりにくかったなと思う広報誌もございました。これは学校教育もそうかと思います。せっかくすばらしい活動をされているのに、それを伝えなければいけない中学生、保護者に伝わってないということであれば、やはりその魅力という面では少し減少しているという感は拭えませんので、やはり魅力のある学校とは、情報発信力も含めて魅力ある学校ではないかと思えます。

また、学校の中身というのは変ですけれども、昨年、九州のPTAの会合の中で、宮崎県の進学校の校長先生が、本校では、70%以上が県外の大学に出ており、学校としても、外に出ることで、地元のよさが分かり、それが最終的に地元を支えるのだという理念で教育されていることを聞きました。これは熊本県でも言えることではないかと思えます。決して熊本市内に進学することや、大学で中央の大学に出ることが悪いわけではなく、その高校の中で、いかに地元の大切さを理解させる教育をするかということも、非常に今後、重要ではないかと考えています。またその点について、やはり保護者は現役の時には非常にわがままで、皆様に大変迷惑をかけていると思えます。その分、子どもがいなくなった後も、高校に想いを馳せるということは大切ではないかと思えます

ので、今後、本会といたしましても、そういった努力を小中高で連携してできるように頑張っていきたいと思います。大変貴重な経験をありがとうございました。

【半藤会長】

○奥田委員、最後になります。教育への思いをおっしゃっていただけますでしょうか。

【奥田委員】

○全ての回で、オンラインでの参加となってしまう申し訳ありませんでしたが、委員の皆様のご発言から学ばせていただくことが本当に多い会でした。事務局の皆さんも多様な意見をまとめて素晴らしい提言を作ってください、ありがとうございます。改めて皆さんのお話も聞きながら私も自分自身の現場での経験を振り返り思うことは、やはりこういう教育を変えていくという時の難しさは、目の前にいる生徒の学び自体をどうよいものにしながら、それに加えて中長期の変化を作っていくかという、視点の切り換えといいますが、短期と中長期をどちらも見据えながら進めていくところがすごく難しくも重要なところだと思っています。一方で今のお話にもあったように、卒業した後、その魅力ある学校で育った卒業生たちが、地域の外にいても、地元においてもどちらにしてもその高校の、現役の生徒たちに関わりながら、次は育てていく側になっていくという循環ができていくと、今学んでいる生徒にとっても、そこで育った卒業生にとっても、そして地域にとっても、接点を持ち続けるという意味で、学びの循環が生まれる教育になっていくのではないかと考えています。この素晴らしい提言が、ぜひ具体化されていくように、引き続き力になれることがありましたらと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。半年間ありがとうございました。

【半藤会長】

○ありがとうございました。では、副会長越猪委員、よろしくお願いします。

【越猪委員】

○3点あります。一つはこの会は県立高等学校という、冠が付いている会議ですが、熊本県の子供たちのことを考えれば、当然、県立学校のこと、私立学校のこと、私立高校も県立高校もある地域があるわけで、今回の会議の中で、私は県立学校で仕事をやってきましたが、私立の立場から見たらどう見えているのかとか、地域の中学生から見たらどう学

校が映っているのかということ、もう1回考えなければいけないなと思いました。熊本県の教育をどんなふうデザインしていくのかということが、この会の一つの趣旨ではなかったらうかと思っています。熊本の子ども達を支えているといいますが、先生方の働き方が、子供たちの笑顔に繋がっていくというか、一人の輝きに繋がっていくということはよく言われますので、こういう変化の激しいそして、非常にいいプランが出ると、学校の先生たちがそれにどう対応していけばいいのかということで、学校の中では議論が始まります。そういった時に、今、県教育委員会で進めていただいておりますICTの環境整備などは、それはもう学校の先生たちにとってみれば非常にありがたいことですし、積極的に働き方改革を進めてくださいということで、様々な支援をいただいておりますのも、学校の先生方にとってはありがたい話だと思っています。そういう内容がこの提言案の中に、滲み出ているといいますが、盛り込まれているというのが非常に嬉しいなと思いました。

もう一つは国際バカロレア認定校の設置等についても、提言に記載されていますが、より詳細な検討を行っていくという表現で書いてあります。これは、バカロレア認定校の設置等については、かなりハードルが高い仕組みに挑戦するということになるらうかと思えます。その時に、この認定を受けた学校が、先ほどありました、持続可能といいますが、認定されてその学校で学ぶ子どもが単にグローバル人材というだけではなく、本当にグローバルリーダーとして活躍できるような、そういう仕組みが、このバカロレア認定校の中にはあると思っておりますので、それが本県にしっかり根づくような、より詳細な検討を、根づくための検討をお願いしたいと思っています。

最後に、先ほど申し上げた、ICT環境がしっかり整って参りますと、探究活動がもっと盛んになってくると思えます。菊池高校の例が、内村委員からありましたが、今、各学校で探究活動がものすごく進んでいます。ある学校では小学校中学校の学びを高校に取り入れるために、新入学生に、小学校中学校の総合的な学習や探究で何をやりましたかと全員にアンケートをとって、それを集計している学校があります。そうすると、一例として、朝顔の研究をやり、朝顔の研究を高校の探究でもっと深めたいですかと聞いてみると、大学の先生と朝顔について具体的に話してみたいという希望を持っている子供たちがいるのです。ですから、教育環境が整っていくと、子供たちの多様な学びが保障され、その多様な学びが保障されてくると、先生たちの働き方も多様になってきて、一方で忙しくなる先生が、一方で、全くそういう探究に興味関心のない先生方も出てきて、そこをしっかりと現場で考えながら進めていくと、熊本の教育の未来は非常に明るいなと思った次第です。そういう意味で、この提言案につきましては、いろんな視点から、素晴らしい内容になっていると思っていま

すので、現場ではこれを形にできるようにしっかり協力して、進めていきたいと思っています。

#### 【半藤会長】

○皆様ありがとうございました。今、副会長からは現場に即した形で、具体的なお話をいただき、総括をいただいたと思いますので、私としては、最後に感想を述べさせていただきたいと思います。大きく二つのことがございます。

まず1点目は、教育というものは、結局、未来の社会の作り手を育てるということになりますので、学校の関係者だけではなく、社会全体として真剣に取り組まなければならないと感じたところです。これまでもそういった認識はあったかと思いますが、改めて、強く意にとどめるべきだということを感じました。

2点目は、教育の今、教育の現在を語るにおいて、今の世はこれでよいのか、良くなってきたのかということ、はっきりと認識すべきことだろうと思います。私どもが子供の時代に育った環境より、今の方がずっと良くなっていることはたくさんあります。しかし、良くなっていない部分はないのかということも、やはり、しっかり正面からとらまなければならないのではないかと感じています。内村委員からお話がありましたが、若者たちの心の問題で、例えば就職してもすぐ離れてしまうということがどういうことなのか、根気の問題なのか、或いは登校拒否のようなものも増えているが、これは協調性の問題や、仲間と過ごしていくことに対する力が弱くなっているのかとか、そう考えていきますと、我々人間の精神性の部分は、教育によって良くなっているか、良くなっていないのか、或いは変わるもの変わらないものは何かといったことを、しっかりと議論していく必要があるのではないかと感じています。やはり教育は不易と流行だろうと思います。変わっていくことで、どんどん良くなっていくものと、昔と変わらずにしっかりと身につけていかなければならないこともあるのだろうと思うのです。先般、姜尚中（カンサンジュン）さんとお話をしたのですが、今の時代は明治時代と似ているのではないかとお話ししました。明治時代は、西洋化、近代化にうまく順応したものは成功者になったのですが、これに順応できなかったものは、滅びていったのです。そういう構造でとらえた時に、現代はまさに Society 5.0、SDGs、ICT、AIの時代です。これにうまく順応した者はおそらく、富をも手にする成功者になるのだろうと思います。でも全員が成功者になればいいのですが、これに順応できない者もいるのではないかと。そういう人たちはもしかしたら浮かばれないのではないかと考えたときに、私は明治の時代に、将来を心配した夏目漱石の言葉が大変心に残るのです。それは明治の、これからの時代に、とても大切に

しなければいけないことは、人格の陶冶だということでした。しかし、これは漱石が唱えただけではなく、明治の文学者が、言葉の使い方はいろいろありますが、やはり同じような趣旨で人格を陶冶せよということをしきりに唱えたことが、明治と似ているこの時代に、何をなすべきかというヒントになるのではないかなとも思っています。英語には、人格の陶冶という言葉がないそうです。西洋人の人に英語で言ったらどういう概念になるのかと尋ねたら、モルディングキャラクター（molding character）或いは、ビルディングキャラクター（building character）ということでした。グローバルな世の中ではありませんが、日本人が作り上げていった一つの価値観、大切にしてきた価値が人格の陶冶ということであるとすれば、これを教育の世界で見失うことがあってはならないと強く感じた、今回のあり方検討会でした。好き勝手に言わせていただきました。最後の検討会ということでお許しいただければと思います。各委員から議論いただき、以上をもちまして、全あり方検討会の議事を終了したいと思います。事務局にお返しいたします。

#### 【事務局】

○委員の皆様、ありがとうございました。最終提言につきましては、本日の内容を踏まえまして、修正を施し確定次第、委員の皆様へお知らせをします。その後、半藤会長から最終提言を教育長へ御提出いただくとともに、県教育委員会のホームページで掲載等を行い、県民の方々への周知を図って参りたいと考えています。それでは閉会にあたり、古閑教育長が御挨拶を申し上げます。

#### 【古閑教育長】

○半藤会長をはじめ、委員の皆様方には大変お忙しい中、また今年度はコロナ禍の中で、熱心に御議論いただき、大変ありがとうございました。高校のあり方という、大変難しいテーマと申しますが、様々な課題を抱えている県立高校に対して、各委員の皆様方から、様々な貴重な御意見をいただきました。特に本日も貴重な御意見をいただきましたので、先ほどお話がありましたように、半藤会長と御相談の上、できる限り反映をさせていただきたいと考えています。今回がいわゆるスタートになろうかと思っております。いただきました御提言を一つの拠り所とさせていただきながら、これから、まずは地域の方々ともしっかりと御議論させていただきながら、時間的緊迫性といいますが、中学生の卒業生数が令和9年度まで、幸い下げ止まりする期間があります。その期間までに、しっかりと時間的緊迫性を持ちながら、先ほどお話が出ましたが、ロードマップを作成しながら、しっかりと計画的に、高校のあり方、高校の魅力ある学校づくり、また地元の中学生保護者から選んでもらえるような高校づくり、そう

いったものをしっかりと取り組んでいきたいと考えています。委員の皆様は一応これが最後ということですが、今後もいろんな場面で、またいろんな形で御相談をさせていただく機会があるかと思しますので、引き続きの御支援、また御理解御協力をお願い申し上げまして、簡単ではございますが、お礼の御挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

**【事務局】**

○それでは以上をもちまして、県立高等学校あり方検討会を閉会いたします。皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。